

日 本 ボ ス ト ン 会 会 報

発行所 日本ボストン会事務局

ホイットフィールド・万次郎友好記念館開設へ

顧問 藤崎博也

会報第 32 号で、「ホイットフィールド・万次郎記念館」開設のための募金活動が進められている旨をお知らせしましたが、その後の経過をご報告します。

皆様もよくご承知のことと思いますが、横浜市は今年、開港 150 周年を記念して盛んな行事を開催しています。これは 1853 年に米国のマシュー・C・ペリー提督の率いる東インド艦隊が浦賀に来航し、翌 54 年に神奈川で米国全権大使ペリーと徳川幕府との間で日米和親条約が締結調印され、さらにその 4 年後の 1858 年に日米修好通商条約が締結調印された結果、下田・函館の他に神奈川・長崎・新潟・兵庫の開港が定められ、その後神奈川が発展し横浜となり現在に至ったことを記念するものです。

この日米外交関係樹立に先立つ 1841 年に、土佐の漁師の 14 歳の少年、万次郎(のちの中濱万次郎)が、嵐で漂流し無人の鳥島で飢餓状態のところを米国の捕鯨船ジョン・ハウランド号に救助され、仲間の漁師 4 人と共にホノルルに送られる 5 ヶ月の間に、捕鯨船のウィリアム・ホイットフィールド船長にその利発さを認められてマサチューセッツ州フェアヘーブンの自宅に伴われ、ジョン万次郎と呼ばれて小学校に通わせてもらい、その後、数学、測量、航海術なども学び、捕鯨など数々の経験を積んで、1851 年に渡米第 1 号日本人として帰国しました。

この記念すべき船長の旧宅が、荒れ果てた状態で売りに出されたことを聞かれた聖路加国際病院理事長の日野原重明先生は、08 年 1 月に各界の有識者 36 人を発起人とする「ホイットフィールド・万次郎友好記念館開設のための募金」を始められました。

このことは棚橋征一様からお知らせ頂き、今年の

観桜会でご紹介し、皆様にご協力を頂きました。

日野原先生はまた、08 年 4 月に学会の用務でボストンに赴かれた際、5 月 6 日にフェアヘーブンを訪問され、万次郎が現地の人々から「郷土の英雄」として親しまれ、誇りにされ、万次郎ゆかりの場所が「万次郎トレール」として整備・保存されている実態を見てこられました。

日米の外交交渉が 1853 年に開かれた折に、もしこの万次郎が徳川幕府側の通訳の一人として参画することがなかったならば、その折の外交交渉はどのような進展を遂げていたのでしょうか。

「ホイットフィールド・万次郎友好記念館開設募金」は、昨年の NHK の大河ドラマ『篤姫』に万次郎が登場したこともあり、日本開国時の万次郎の働きが世間の共感を呼び、本年 3 月末までに目標をはるかに超える 1 億 1 千万円余が寄せられました。この募金によりホイットフィールド船長の旧宅が購入され、修復後に「ホイットフィールド・万次郎友好記念館」としてフェアヘーブんに寄贈されることになり、また、地元の有名ゴルフメーカーが万次郎に因んだロゴ入りボールを作り、その売上げの一部を寄付してくれることになりました。

日米友好のシンボリックな存在としての記念館は、本年 5 月 7 日にフェアヘーブンの町に寄贈されましたが、今後はその管理運営を、現地の NGO (土佐清水市との姉妹都市委員会が改組した、「ホイットフィールド・万次郎友好協会」) が担当することになりました。維持管理費は永続的に必要であり、そのための募金は今後も続きますので、引き続き有志の皆様のご支援のほどお願いします。(別項参照)。

総会・懇親会のお知らせ [同封チラシ参照]

日時： 平成 21 年 11 月 13 日 (金) 午後 6 時開場、午後 6 時半開会
 場所： NEC 三田ハウス芝クラブ (JR 田町駅、都営地下鉄三田駅下車)
 港区芝 5-21-7、TEL 03-5443-1400
 会費： 当日払い お一人 6,000 円 / (同伴者 5,000 円)
 事前送金 お一人 5,000 円 / (同伴者 5,000 円)
 送金方法： 銀行送金 みずほ銀行浜松町支店
 普通預金口座番号 1578981 口座名 「日本ボストン会」
 申込先： 日本ボストン会事務局 (同封ハガキ、又は E-mail にて 11 月 5 日までにお知らせ下さい。E-mail : info@boston.ne.jp)

日本ボストン会の活動はホームページにてご覧下さい。 <http://www1.biglobe.ne.jp/~boston/>

今年も千鳥が淵のサクラの定点観測をしました



観覧会平成二十一年四月四日
於ホテルグランドパレス

(敬称略)

- | | | | | | | | | | | |
|-------|------|-------|-------|-------|------|------|-------|-------|-------|-------|
| 小野田勝洋 | 藤崎博也 | 小板橋忠志 | 生田英機 | 関直彦 | 幸野真士 | 酒井典子 | 江口信弘 | 俣野真由美 | 関向子 | 沖洋子 |
| 藤盛紀明 | 篠崎史朗 | 吉野静子 | 井上恵美子 | 水野筑弥乃 | 酒井一郎 | 近藤宣之 | 藤盛富美子 | 藤盛富美子 | 藤盛富美子 | 藤盛富美子 |

茂木賢三郎夫妻を囲んで



美術・歴史を飲む会
平成二十一年四月二十六日
茂木本家美術館前にて

(敬称略)

- | | | | | | | | | | | | | | | | | |
|------|-----|----|------|-------|------|------|------|------|------|------|-----|-------|------|-----|------|-------|
| 俣野善彦 | 吉田博 | 森啓 | 河内康郎 | 小板橋忠志 | 幸野真士 | 藤盛紀明 | 茂木瓊子 | 法眼健作 | 吉野耕一 | 酒井一郎 | 井上光 | 藤盛富美子 | 法眼浩子 | 岡崎宏 | 滝沢典之 | 俣野真由美 |
|------|-----|----|------|-------|------|------|------|------|------|------|-----|-------|------|-----|------|-------|

写真欠席：三好彰夫妻

(二十七名)

財団法人 茂木本家美術館 〒278-0037 野田市野田 242
電話 04-7120-1011 予約専用電話 04-7120-1489
(電話で開館日を確認、訪問日時を予約の上お出かけ下さい。)

「美術・歴史を飲もう会」

茂木本家美術館・もの知りしょうゆ館見学会

岡崎 宏

河内 康郎

4月26日(日)は前日とは打って変わって温かく晴れ渡り、総勢27名が午前10時半に東武野田線の野田市駅に集まった。酒井幹事の先導で駅から10分ほど歩き、茂木本家美術館(MOMOA)に着いた。

MOMOAでは日本ボストン会顧問であり、本日の見学会を快諾していただいた茂木賢三郎氏が、奥様であり館長の茂木瓊子様とともに出迎えてくださった。

MOMOAの建物は、彦坂裕氏の設計。ゆっくりと楽しんで鑑賞出来るよう、随所に遊び心を持たせた造りになっている。入口を入るとまっすぐに目に入るのは、土蔵と百日紅の木が見え、窓際が額縁になった自然の絵である。窓の近くに寄ると美女の彫刻と並んで外を見ることができ、後ずさりすると床の大理石が窓外の風景を逆さに写すという仕掛けである。

ファウンダーズサロンには、梅原龍三郎氏が絵の具のチューブから搾り出して描いた鯛の絵が掛かっていた。傍らには小倉遊亀氏の葡萄、梅、徳利の3枚の絵が掛かり、陳列棚には彫刻や器などがある。しかも器の敷物を江戸小紋にするなど、細部にまで拘った展示になっている。富士山の絵だけを集めた部屋には、それぞれの絵の富士山の頂が同じ高さになるように配置したり、本来絵を掛ける場所に窓をあけたり、夕暮れの富士山の絵の天井には月の写真を貼ったり、立ち位置によって富士山とヒマラヤの絵が反対側に見えるなど、実に楽しく鑑賞できる。

白い円柱が並んだ部屋は、庭を見るための場所であり、先祖代々伝わる稲荷神社がうっそうと茂る木々を背景に見える。庭に出ると、お社や井戸の周りの4枚の狐の透かし彫りなどを見ることが出来る。浮世絵の部屋は定期的に変えており、今は相撲絵であった。学芸員の加納靖子さんの説明で、春国、豊国、国貞などが描いた力士の絵を楽しんだ。

食事をしながら、途中で具合のわるくなった三好幹事に代わり、茂木賢三郎氏から茂木家の出自やキッコーマンの歴史を伺った。茂木家は遠く大阪夏の陣に遡る武士の家系であり、真木頼徳が討ち死にした後、妻のしげが幼子を抱えて野田に逃げてきたことに発する。初代の七左衛門氏から数えて12代目が103歳でなお健在とのこと。野田に来た頃の辛さを忘れないため、今でも正月に餅を食べず、蕎麦とひもかわを摂るとのこと。

その後キッコーマンの「もの知りしょうゆ館」

私ども家族がレキシントン滞在中にお世話になりました滝沢典之様ご夫妻のお誘いを受け、参加させて頂きました。都心から遠方に住んでいる関係上、普段は皆様方にはご無沙汰を重ねておりましたが、今回の企画が近隣の野田を訪問することで、良き機会と思い、夫婦で参加させて頂きました。

前日は大雨の嵐であったにもかかわらず、当日はすっかり天候も回復し、初夏を思わせる陽気の中のデイトリップとなりました。

最初に訪れた茂木本家美術館は、茂木賢三郎様のご尊父が収集された素晴らしい美術品の数々が展示されているとてもモダンな美術館です。茂木様の奥様が館長で、美術品の一つ一つを丁寧に説明頂き、美術音痴の私どももその見所や価値がとてもよく判り、有意義なひと時を過ごさせて頂きました。

普通、美術館は余り外の光は取り入れないというのですが、この美術館は窓が多く配置されており、太陽の光と美しい庭園が美術品を一層引き立てているのに心惹かれました。

建物の裏手には広い芝生の向うにちょうど淡い新緑を纏った木々が落ち着いた邸宅を囲むように配置され、それこそ一幅の絵画を見ているような気持ちにさせられます。

レストランの戸棚には世界中から集められたソルト&ペッパー容器のコレクションがそのデザインを競っており、こんな容器が一つでも我が家の食卓にあるととても食事も楽しくなるのではなからうかと想像した次第です。

明るいレストランでおそばを頂いた後、キッコーマン醤油工場を見学させて頂き、お土産に生醤油を購入しました。早速その日の夕餉に冷奴と共に工場直売のお醤油を食しましたが、冷たい豆腐とほんのりとした甘さの醤油の味と香りに夏の到来を感じた一日でした。茂木様ご夫妻、幹事の皆様に感謝です。

*に向かい、醤油の出来る工程を見学した。野田は近くに江戸川が流れており、できた製品は川を利用して江戸まで運ぶことが出来るという地の利があった。現在の工場は、品質を均一に保つために自動機械化されているが、製法の基本は江戸時代から変わらないとのこと。見学終了後、カフェで3種の醤油の味の違いを楽しみ、帰途に着いた。

MOMOAは小規模ながら実に贅沢な美術館である。茂木さんご夫妻に感謝。

音楽の会

新緑コンサート

笠原 慶昌

去る5月16日(土)に、関直彦さんのご自宅の、ニューイングランドの薫り漂う素晴らしいコンサートホールにて、会員の皆様限定のコンサートを演奏させていただきました。

出演は笠原慶昌(ホルン、ニューイングランド音楽院修了)、大沼岳彦(ピアノ、ボストン大学修士修了)、西入優子(オーボエ、ボストン音楽院修了)、と、ボストンに留学した3名に、大沼君の妹の千晶さん(ピアノ)を加えた計4名で、昨年の末に赤坂でコンサートを行ったメンバーです。その日にご来場いただきました関さんからお招きにとり、「新緑コンサート」と題して演奏させていただきました。

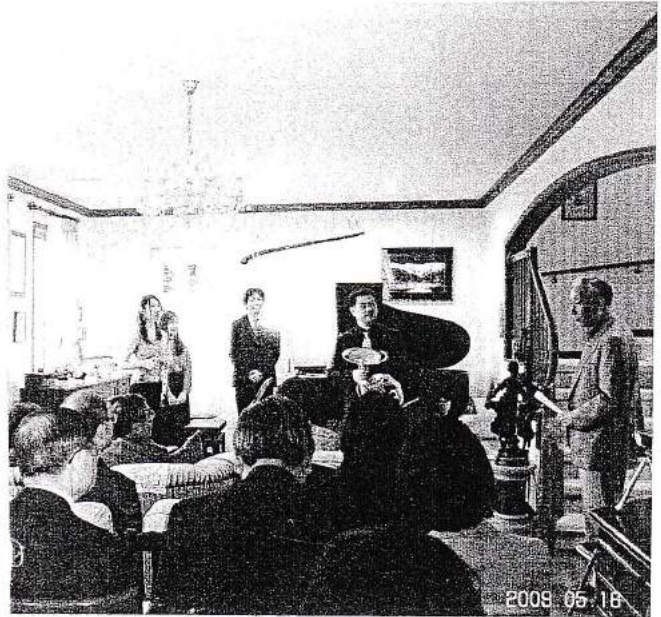
演奏会前半は、ライネッケの三重奏曲を中心に、ピアノ・ソロ(ラベルの名曲「水の戯れ」と、大好評を博しましたロシアのジャズ風現代音楽、カプスチーン)をはじめ、バロック(ルイエ:オーボエ/ソナタ)から現代(バスラー・オーボエ、ホルンとピアノのためのヴォカリーズ・ワルツ)に至る多様なクラシック作品を、後半はラテンアメリカ音楽(ボサ・ノヴァの定番「イパネマの娘」、ピアノラの「デカリシモ」)や映画音楽(「ニュー・シネマ・パラダイス」、朝ドラ「あすか」テーマ曲「風笛」)など、この機会のために新たに編曲したものを中心に、リラックスしていただけるようなプログラムとしました。

最後はピアノも兄妹連弾、4人全員で日本の四季折々の歌のメドレーと、アンコールにお応えして「千と千尋の神隠し」から一曲を演奏しました。

弦楽器などに比べ、近い距離で生演奏を聴く機会の少ない管楽器を含んだ組み合わせだけあって、演奏中に楽器に溜まる水分の処理など、視覚的にも(!)お楽しみいただけたようで、演奏者一同、大変嬉しく思っております。

演奏会後の懇親会では、大盤振る舞いのご馳走と共に、ご来場の皆様から、ボストン滞在中の逸話や音楽に関する様々な貴重なお話を伺うことができ、若輩者としては、ボストン会の、時間的・空間的に積み重ねられた歴史の重みに圧倒される思いでした。

今後も、機会をいただけるようでしたら、是非とも「音楽の会」の活動を微力ながらお手伝いさせていたただきたく存じます。また今後も、メーリングリストなどを通して演奏会のご案内(可能な場合はボストン会割引も!)等もさせていただきたく、よろしく願い申し上げます。



吉田 紀子

東急東横線・田園調布駅を降りて、昔からの高級感漂う太い銀杏並木を通り過ぎ、宝来公園脇の坂を下り、住宅街の坂を上りきった先の一角に、ボストンの生活を思いさせる関家に到着。会員ほか30余名が参加。

5月16日(土)午後3時、今日のコンサートはオーボエの西入優子氏、ホルンの笠原慶昌氏、ピアノは大沼岳彦・千晶氏の兄妹。皆さん、ボストンで腕を磨かれた日本の期待の若手音楽家の方達の演奏です。

前半はクラシック。オーボエの澄んで深い重みのある音色と、ホルンの洪い音色が心地よく、休憩15分を挟んで、後半は軽音楽でなじみのある「イパネマの娘」や、日本の四季メドレーなどを聞かせていただきました。笠原氏はホルンの水滴をとる一方で、額の汗をぬぐい、忙しく、懸命に司会をしてくださいました。

オーボエとホルンの共演は珍しく、どちらも私の馴染みのない楽器を身近で楽しめることあって、とても興味深いものでした。

コンサート終了後はパーティとなり、関様のお心遣いで、沢山のいろいろなお料理がテーブル狭しと並び、デザートまで用意され、米国でよく招かれたようなホームパーティを思い出しました。出演者と参加者の会話が弾み、関家からの眺望は素晴らしく、夕闇せまる多摩川と夜景が印象的でした。

このようなアットホームなコンサートを主催してくださった関様に感謝と共に、このような機会に出会えたボストン会にも感謝の一日でした。

音楽の会

イクタ・シスターズの連弾

生田 敦子・恵子

2009年7月12日(日)午後3時、日本ボストン会・音楽の会主催の演奏会にてピアノ連弾の形で姉妹揃って出演させて頂きました。田園調布駅から閑静な住宅街を10分ほど歩くと、関直彦様の潇洒なお宅に到着します。こちらが今回のホーム・コンサートの会場で、スイスから帰国直後の私達を、関様ご夫妻が温かい笑顔で迎えて下さいました。

当日の会場練習のために、開演数時間前にお宅にお邪魔しました。二人で練習していても、つい視線がニューイングランド風のさわやかな内装や見事な調度など、あちこちに泳いでしまい、お互いに「ちょっと！ど見ているの！」というセリフを言い合う羽目になる始末…。ピアノもヤマハの特別記念製作のもので、最高のホーム・コンサート会場で演奏させて頂くことができ、大変光栄でした。

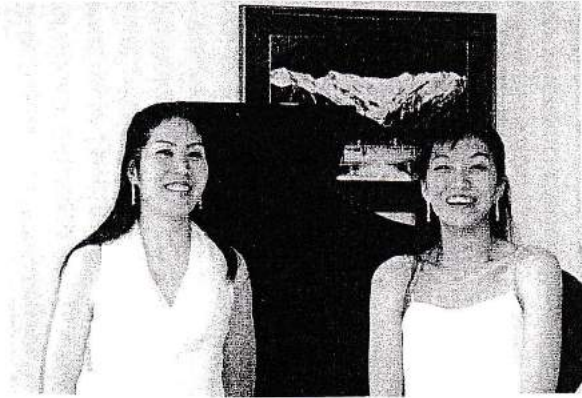
暑い夏の盛りの日だったにもかかわらず、大勢の方がおいで下さいました。会場は空調が利き、アットホームで温かい雰囲気の中、一曲一曲に盛大な拍手を頂き、長旅の疲れも時差ボケも一気に吹き飛ばしてしまうくらい、楽しく演奏させて頂くことができました。控え室として二階のお部屋をご用意下さり、ホーム・エレベーターで降りて下のステージに登場…という生まれて初めての体験で、曲の合間の出入りにもわくわくしてしまいました。

演奏会終了後は、おいしいお食事を頂きながらの懇親会で、私達の演奏に温かい拍手を下された皆様お一人お一人と、お話しすることが叶い、さらに楽しいひと時を過ごさせて頂きました。

今回のホーム・コンサートが日本では初めての連弾お披露目だったのですが、聴きにいられた方々が口々に、連弾という演奏形態を身近に見て聴いて…という体験が新鮮で興味深く楽しめた…といった趣旨の温かいお言葉をかけて下さり、本当に嬉しく思いました。

美味しいお食事と楽しいおしゃべりに、亡き母の生前、狭いながらも楽しい我が家で、父のボストン赴任時代に親しかったご家族をお招きしてのクリスマスパーティを開いた頃の雰囲気を思い出し、それもまた懐かしい感慨ひとしおでした。

日本ではまだ、このような素敵なホーム・コンサートの機会はなかなか無いと思います。大変に貴重な機会を与えて頂きました。日本での今後の活動基盤を広げていく、最初の一步を、自身の原点とも言える日本ボストン会で踏み出せたことは、何もの



(左から 生田敦子・恵子)

プログラム

□ラフマニノフ(1873~1943)6つの小品 Op.11

舟歌
スケルツォ
ロシアの歌
ワルツ
ロマンス
スラヴァ!

□ブラームス(1833~1897) ハンガリー舞曲集より

第1番 ト短調
第3番 ヘ長調
第5番 嬰ヘ短調
第6番 変ニ長調
(休憩)

□モーツァルト(1756~1791)ソナタ変ロ長調K.358

第1楽章 アレグロ
第2楽章 アダージオ
第3楽章 モルト プレスト

□ サン＝サーンス(1835~1921) 動物の謝肉祭

序奏と堂々たるライオンの行進
雌鶏と雄鶏
らば
亀
象
カンガルー
水族館
耳の長い登場人物(ろば)
森の奥のかっこう
大きな鳥籠
ピアニスト
化石
白鳥
終曲(フィナーレ)

*にも変えられない幸せです。関様ご夫妻をはじめ、楽しく演奏会を盛り上げて下さったご来場の皆様、本当に有難うございました。

フェノロサ、ビゲロウと三井寺法明院 (V)

山口 静一

【14】仏教研究ノート

ヘーゲルやアリストテレスを想起させる仏教に、二人は余程驚嘆したのでありましょう。日ならずして講師を雇い、熱心な仏教教理の研究が始まりました。1885年(明治18年)6月27日の日付を記したフェノロサ筆仏教研究ノートが残っています(ハーヴァード大学ホートン・ライブラリー蔵)。

内容は仏教教理、特に「四種法身(シシュホッシン)」「五転(ゴテン)」「十縁生句(ジュウエンジョウク)」「遮情門と表徳門」など密教の基本的概念を述べた入門書をテキストに、おそらく講師の英訳解説を20ページにわたって筆記したのですが、テキストも解説者の名前も不明です。「十縁生句」中の「虚空華(コクウゲ)」をショクウゲ(虚空華)と読み違えた箇所などがあり、あるいは講師は専門家ではなく有賀長雄など教え子だったとも考えられます。

注目すべきは「五転」の説の最後すなわち「方便究竟(ホウベンキョウウ)」の部分です。「方便すなわち真実の教えに導いて他を利するため、ブツは如何なる異教の姿も取り得るとする真言行の最高段階」という講師の解説を筆記したフェノロサは、ノートの余白に「キリストもまたブツの化身のひとつたり得る」と書き加えているのです。これは仏教を哲学として理解した以上にフェノロサにとっては大きな発見でした。

【15】美術講演で仏教擁護

このころのフェノロサとビゲロウは、狩野芳崖や文部省の岡倉天心らを加えて「鑑画会」という日本画家を育成・激励する組織を作っていました。会員の新作展示とフェノロサの美術論講演が主な活動で、古画の模倣に終始する農商務省系の「龍池会」に対抗する組織でした。

仏教研究ノートを取る以前の5月4日、フェノロサは京橋日吉町のホールで催された鑑画会の例会で、宗教と美術の関わりについて演説しています。通訳は有賀長雄でした。日本の美術が西洋模倣と旧弊盲従とを克服し新しい明治の美術を追求すべきであること、宗教もまた非妥協的なキリスト教の蔓延を防止し、旧態依然たる仏教を改革しなければならない、というのが講演の主旨でした。ここで彼は、キリスト教が知的性格に弱点を持ちながら実践道徳面に強く、逆に仏教が実践道徳面に弱点を持ちながら知的理念に強いこと、従ってキリスト教が知的完全さを求めれば仏教に近づき、仏教が道徳的完全さを目指せばキリスト教に近づくという興味ある見解を示しています。

当時耶蘇教と対決していた仏教徒たちにとって、このフェノロサ所論は西洋人による貴重な仏教優越論と映ったようです。翌月の仏教雑誌は「画題に仏教を用ゆるの得失」の見出しで直ちにフェノロサ演説の大意を紹介します。「・・・耶蘇教も今一層進化せば必ず仏教の如くなるものならんと思うなり。然れば日本将来の宗教は唯一の仏教あるのみ。たとい耶蘇教あるも結局仏教の範囲内にありて運動するものたるに過ぎざるなり云々」(『令知会雑誌』)。この記事は翌年9月の仏教雑誌『教学論集』にも再録されたほどでした。

【16】神智学への関心

これはフェノロサ、ビゲロウの受戒後、明治19年1月刊『令知会雑誌』に掲載されたのですが、「耶蘇教を捨てて仏教に帰依した理由」について南条文雄(ぶんゆう)と平松理賢とが質問しビゲロウが答えた記事が出ています。

ビゲロウは数項目に亘って両者を比較しました。仏教が「哲学」であり自然科学にも背馳しないことなどを挙げた後、ひとつの注目すべき発言をしています。原文をそのまま紹介します。

“・・・仏教中には世間幾多の学問以外に一の別路を開けり。その別路とは人の思想を読む術(即ちソートリーディング)、次に動物電気術、次に神智学等の事を完全したる者なり。”

耳なれない言葉が続出しますが、「人の思想を読む術」とは1880年代欧米で関心を集めていた「テレパシー」のこと、「動物電気術」とは「動物体内に発する一種の電気作用」によって人を「催眠状態」にすること(昭和10年平凡社『大辞典』)です。いずれにせよこれは、ビゲロウが密教のオカルト的要素に強い関心を抱いていたことを物語っています。

また「神智学」(Theosophy)ですが、これは本来「神秘的・直観的霊智によって神を体験・認識しようとする(大辞林)」もので、西洋には古くからあった神秘説でした。しかしビゲロウの言及した神智学は、1875年ブラヴァツキ夫人(Helena P. Blavatsky. 1831-1891)がオルコット(Henry Steel Olcott 1832-1907)と共にニューヨークに設立した神智学協会(Theosophical Society)という教団のことです。その後教会本部はインドに移り、仏教やヒンドゥー教から輪廻(りんね)、業[カルマ]、解脱(げだつ)等の教義を採用して教団は著しい発展を遂げ、各国の信徒は10万人に及んだと言います。

フェノロサ、ビゲロウと三井寺法明院(V)(つづき)

身口意(シン・ク・イ)三密の修行によって大日如来との合一を達成し、「即身成仏」を得ると説く密教こそ、テレパシーの秘密も、宗教的恍惚状態の謎も解明し、神智学を完成させるもの、とビゲロウは考えたのでありましょう。

オルコットは「西洋の仏教徒」として明治18年に日本に招かれ、仙台、東京、山口などを巡廻講演しましたが、大乘仏教と違ってオカルト色の濃いその説教に日本の仏教者たちはかなり戸惑いをもって接したようです。

【17】戒律を守る

フェノロサ、ビゲロウが三井寺法明院の桜井敬徳〔教導職中教正〕に受戒した明治18年9月21日は、上記ノート取って3ヵ月後のことです。町田久成の小梅の別邸で受戒したことは拙文〔本誌第30号、07年10月〕の冒頭で述べた通りです。同年9月1日に「教用にて此の程出京」〔東京日日新聞〕した敬徳阿闍梨を二人はしばしば小梅を訪れては仏教教学に関する質疑を重ね、遂に21日の受戒に至ったものです。

受戒とは仏門に入ろうとする人が仏法の戒律を遵守することを誓う儀式です。フェノロサの受けた戒律は「菩薩戒」、ビゲロウは「十善戒」でした。

「菩薩戒」は「梵網戒」とも呼ばれ、十種の重禁戒と四十八の軽戒から成り、前者は殺生、偷盗、邪淫、虚言、酒の売買、誹謗、吝嗇などの重罪、後者は飲酒、食肉、食五辛、蓄殺生具、貪財惜宝など比較的軽微な罪に対する戒めです。

フェノロサはそれまで酒を嗜み、ビフテキを好み、旅行中は護身用にピストルを携行していたという記録もありますが、以後肉食を絶ち〔東京日日新聞〕同年11月25日記事)、おそらく武器携行もアルコールも控えたことでありましょう。

またビゲロウの「十善戒」は不殺生・不偷盗、不邪淫・不妄語、不綺語、不悪口・不両舌、不貪欲、不瞋恚、不邪見という在家信者の守るべき10種の戒律で、「梵網戒」の十重禁戒と大きな違いはありません。

受戒した二人がそれぞれ諦信(たいしん)、月心(げつしん)の法号を授けられ、敬徳が二人のために梵網菩薩戒経を講じたことも既述しました。

【18】桜井敬徳を慕う

仏教教理以上にフェノロサ、ビゲロウを惹きつけたのは桜井敬徳の高潔な人格でした。二人は慈父を慕う子供のように師を敬慕しました。後にフェノロサは長詩『東と西』(1893年)の中で敬徳を「白衣の僧」として登場させ琵琶湖の湖畔天台宗三井寺の敬徳阿闍梨を、最も靈感に満ち、また誠実に惜しみなく宗教上の事柄を教示された



桜井敬徳阿闍梨肖像

町田久成著『敬徳大和上畧傳』口絵より

我が師として、私は今でも崇敬してやまない。京都、奈良、また日光の近傍で師と共に過ごした日夜は実に貴重なものであった。師こそはまさに、精神界に於ける騎士道の、崇高なる生ける規範であった。1889年、師はこの世を去った(『東と西』自註より)と追憶しています。

フェノロサは欧米出張中(明治19年10月より1年間、ビゲロウ同行)も敬徳との文通を中断していません。明治21年の政府による三井寺宝物調査の折り、フェノロサは岡倉天心と共に法明院を訪れて敬徳の法話を聴き、大津名物の精進料理をご馳走になった上、数日間止宿したと敬徳は日誌に記しています。法明院はフェノロサにとって、すべての俗事を忘れ清浄な雰囲気の中で心を休める別天地となりました。

公務に縛られることのなかったビゲロウもしばしば法明院を訪れ、また敬徳を東京に招いて教理上の疑問を質しました。ボストン美術館(ビゲロウは後にその理事になっています)とハーヴァードのホートン・ライブラリー、及び法明院には、それぞれ教通の書簡が資料として保存されています。いずれも質疑応答の手紙で、翻訳は岡倉天心か弟の岡倉由三郎が引き受けています。

(次号につづく)

日米友好の礎を築いた人——ジョン万次郎ニュース N0.3 より転載

「ホイットフィールド・万次郎友好記念館」完成

日野原重明(発起人代表)

2009年5月7日、「ホイットフィールド・万次郎友好記念館」の修復がなり、米国マサチューセッツ州フェアヘーブンの町に引き渡されました。166年前に万次郎が滞在した当時の面影をそのままに、見事に再現されたこの家の白色のポーチにホイットフィールド船長と万次郎の子孫とが並んで立ち、フェアヘーブンの町の人たちと日本から馳せ参じた71人の参加者から、日米友好の新しいページが開かれたことを祝う熱い拍手が寄せられました。

166年前の歴史に思いを馳せて

私が初めてボストンから車で1時間半のこの町を訪れたのは、この1年と1日前の2008年5月6日。日本で募金活動を始めてからわずか3ヶ月余りのことでしたが、日本での思わぬ反響に意を強くして、記念館とすべくホイットフィールド船長の旧宅の状態を視察に出向いたのでした。旧宅はかろうじてその名残をとどめていましたが、しばらく無人のまま放置されていたので荒廃が進み、一時も早く修復に着手しなければならないというような佇まいでした。

私がこの旧宅保存のために日本で募金活動に心血を注いだのは、このときに出会ったフェアヘーブンの町の人たちが万次郎の故国から来た日本人の私たちをあたたかく歓迎してくれたからです。そのフレンドシップに私たちは心打たれました。万次郎を郷土の誇りとしてフェアヘーブンの住民に親しまれ、尊敬されていました。万次郎の現地での存在は日本人の私たちの想像を超えるものでした。

幸い募金活動も順調に進み、約束の1年後には予定を超える額を集め、万事計画通りに運ぶことができました。

きらめく光の中、粛々とセレモニーが挙行

さて、5月7日のこの日、ボストンを出発した朝にはかなり強く降っていた雨も、フェアヘーブンに着き、譲渡式のセレモニーが行われる9時半頃には薄日が差し始め、北海道と同じ緯度に位置するフェアヘーブンの町にはまだ早春のみずみずしい木々の葉や赤、黄、白の花々が私たちを歓迎してくれました。

譲渡式開会に当たり、日米の国旗が掲げられ、日米国歌が奏でられる荘重な雰囲気の中で、譲渡のサ

インが私とこの町の市長と要人との間で交わされ、それぞれが挨拶して、譲渡式は終了しました。それから隣のブロックにあるユニテリアン教会において、日本から同行した中島良能氏の指揮で、日本と米国にちなんだ室内楽の演奏会がもたれました。

次いで、Cherry Street 11番地友好記念館に場所を移しての除幕式が行われました。独立戦争当時の民兵の衣装を身につけた3人の砲手が轟かす3発の祝砲に合わせて、私は「WHITFIELD - MANJIRO FRIENDSHIP HOUSE」と書かれた記念板を覆っていた幕を空に向かって力いっぱい打ち振りました。

現地の新聞はその場面を「Dr.Hinohara unveils the sign with a flourish」と報じていますが、私の気持ちは天空に翻ったこのベールのように感動ではちきれんばかりでした。

このあと歓迎昼食会があり、中濱家とホイットフィールド家の子孫がそれぞれ紹介されるなどさまざまなセレモニーがつづきます。

翌8日の午後にはボストン市に移り、昭和女子大学ボストン校で同じく「友好のためのコンサート」、そして、その夜はボストン総領事館主催の完成記念レセプションが行われました。私たちはその翌日、アムトラックでニューヨークに移動、翌々日の午後にはシェラトンホテルで講演会。300人の日本人、米国人が集い、11日夕刻にはニューヨーク日本クラブ(Japan Society)でのレセプション、次いでニューヨーク総領事館公邸訪問と歓迎夕食会。そしてその翌日は首都ワシントンに移り、夕刻から日本大使館でのパーティと晩餐会に列しました。いずれも民間レベルでの日米友好の新しい扉が開かれたことの喜びに満ちたものでした。私は今さらのごとく「文化」や「友情」という形では見えないものが引き起こす力に圧倒される思いでした。

これからこの家は日米友好のための記念館としてフェアヘーブンの町の人たちの手に委ねられ、運営されることになりました。私たち募金に関った発起人一同はこれから「ホイットフィールド・万次郎友好記念館」協力の会として引き続き日本からの支援をつづけます。私は近い将来、オバマ米国大統領と日本の総理とがこの記念館において日米会談を持つこと期待しています。今後、日米の友好の絆がますます強く結ばれることを願ってやみません。

一般財団法人「ホイットフィールド・万次郎友好記念館」協力の会事務局：

(同転載)

歴史の新しいページ

北代淳二〔発起人〕

中濱家に伝わるジンクスが一つあります。万次郎にちなむ行事の始めには必ず風雨が起きるというものです。そして行事が終わるまでには晴れ間がとって代わるといいます。

「ホイットフィールド・万次郎友好記念館」の完成を祝った5月7日も、フェアヘーブンは早朝から激しい雨でした。しかし日野原代表の手により、新装なった記念館の除幕が行われた頃には雨もあがって、晴れ間こそ出ませんでした。そのあとの「万次郎トレール」の散策は傘をささずに楽しむことができました。万次郎の劇的な生涯は嵐による漂流から始まったのだから、というのがこのジンクスのオチになっています。

いずれにしてもこの友好記念館の開設によって、ホイットフィールド船長と万次郎の友情から始まった日米草の根交流の歴史に、新しいページが加えられました。これからはフェアヘーブンのホイットフィールド・万次郎友好協会が記念館の運営に当たり、日本側はこれを支援する形になりますが、記念館の活動を成功させるのは双方の共同責任だといふべきでしょう。

最大の問題は記念館の運営経費をどのように確保するかということになります。記念館は町の公共財産となりましたが、町の財政からの補助金は望みず、自前の募金によってまかなわなければなりません。幸い記念館完成のあとの日野原代表のニューヨーク日本商工会議所基金から年額3000ドルを5年間にわたって援助して下さることになりました。これを呼び水として今度はアメリカでの募金が始まりますが、折からの暗雲立ちこめた経済情勢の中では募金の晴間を見るまでには大変な難航が予想されます。日本での募金活動はひとまず終えましたが、ご芳志は引き続き大歓迎です。

日本に帰ってから高知にお住まいのB. K. さんという女性からお便りをいただきました。「テレビや新聞報道を見て、今回の記念館の意義を考え、今後の発展について微力を尽くしたいと思った」とあり、次の一句が添えられていました。

ジョン万の住まいし館風薫る

このほかにもいろいろなところで、「ホイットフィールド・万次郎友好記念館」のことや万次郎のことが話題になっているのを耳にするようになりました。万次郎に対する日野原代表や多くの仲間たちの熱い思いが、薫風に乗って静かに広がり、友好記念館を成功させる大きな力が生まれつつあることを「感じて嬉しくなります。

(同転載)

収支計算書 (2008.12.1.~2009.9.15.) (単位: 円)	
科 目	金 額
収入の部 (収入合計A)	113,974,852
寄付金収入	113,150,387
雑収入	824,465
支出の部 (支出合計B)	100,683,531
旧W邸取得費用	88,498,838
(直接費用 49万5千ドル、)	52,331,422)
(修理・修繕費用 15万ドル、)	33,197,299)
(その他)	2,970,117)
記念館会館関連費用支出	7,638,764
募金活動関連費用支出	4,545,929
収支差額 (A) - (B)	13,291,321

(注: 発表された報告を見易い表記にしました。念)

ボストン日本協会からの便り

May 10, 2009

Dear Tanahashi - san.

Thank you for your e-mail. I attended the ceremonies on May 7 for the dedication of the Whitfield-Manjiro-Friendship House in Fairhaven, MA - and it was one of the most moving experiences of my entire life in *nichibei-kankei*. Symbolically, this is hugely important. Exactly 166 years to the day that Nakahama Manjiro first set foot on American soil on May 7, 1843, the house where Manjiro spent his first nights in America has now opened to the public as a permanent monument to the first person-to-person Japanese-American friendship. Just think about it: the friendship of two men, developed into the friendship of two families, two towns, two countries! The entire day in Fairhaven was wonderful.

Then the next day, the Japan Society of Boston sponsored a public meeting with Dr. Hinohara and his delegation from Japan and a concert by the Hinohara Festival Orchestra that is traveling with him. It was a beautiful concert, performed for a full-house audience at Showa Boston Institute, followed by a dinner at the home of the Consul General of Japan, located nearby in Chestnut Hill.

I hope you will share this information with BAJ members who made contributions to this memorable project at the suggestion of Dr. Fujisaki.

Best regards,
Peter M. Grilli
President

美術の会

Jules Breton (1827~1906)

フランス19C 絵画展—横浜美術館

19C、田園風景を主題に描いた画家達の一人ブルトン、彼は田舎での日常生活に美と古典的な響きを与えた画家であった。今回展示のブルトン描く休息(1864)はBoston美術館で何度も目にした、ろうそくを持つ女(1873)を思い起こす。

ブルトン描く休息は、農婦が右手をあごの下に置き、土手に腰掛け、一息ついている。彼女はドレープの多い濃い紫のスカートをはき、その上に緑濃い大きなエプロンをしている。

頭にターバン風に巻くアースカラーのスカーフは夕日に映えて美しい。イヤリングをした耳元から顔全体は細かく描かれている。何かを考えている様な柔和な目つきは、古典画に登場する天使にも似ている。空間は平坦に描かれて女性がぐっと前にせまってくる様である。

鋏を持つ彼女の腕と大地にしっかりつけた彼女の足は何となくまいこと。左側に描かれた赤い野の花(ひなげし)の色が女性の濃緑色エプロンと響き合っている。

ブルトン描く、Boston美術館のろうそくを持つ女の画面いっぱい描かれた女性も又同様に顔立ちが優しさに満ちている。正確ではっきりした輪郭で人物が描かれている。ドレス、ロザリオ、レースの衿、そしてレースのスカーフ、これらの衣装はフランス、ブルターニュ地方と思われる。

女性の持つ長いろうそくの灯は、今、灯されたかのかすかに揺れている様であった。

田舎の主題に愛着を感じた画家ブルトン、このろうそくを持つ女に見られる様に、農婦に象徴的な役割を与え、道徳と家族、田舎の社会において、キリスト教が重要であることをも表現している。

1948年に起こった革命後、強い女性への賛美を持って描く画家が増えていた。その内の一人、画家ブルトンは故郷を想う心が人一倍、強い様であった。

酒井典子

名古屋ボストン美術館

愛と美の女神—ヴィーナス展

2009年7月18日から11月23日まで開催中。

問合先：名古屋ボストン美術館

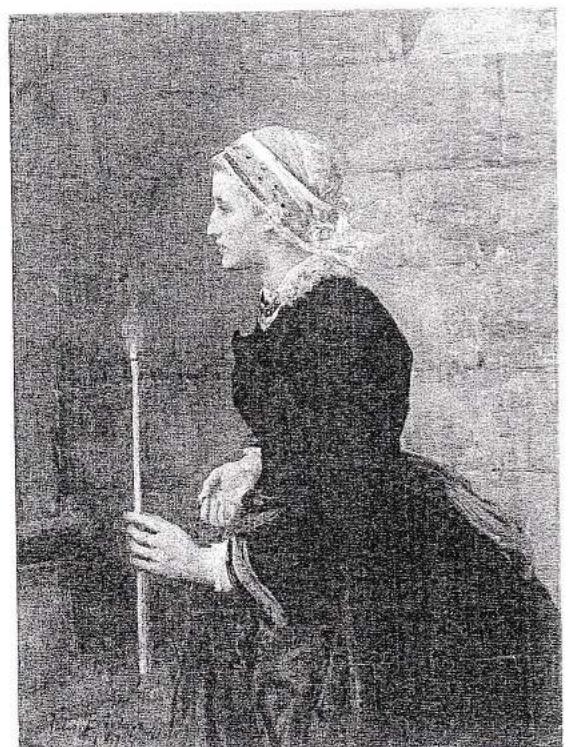
☎052-684-0101 (代)



Jules Breton “休息” 1864

油彩 カンバス 74.5 x 60.5 cm.

Arras, Musée des Beaux Arts



Jules Breton “ろうそくを持つ女” 1873

油彩 カンバス 54 x 39.9 cm.

追悼



エドワード・ムーア・ケネディ上院議員

水野 賀弥乃

平成 21 年 8 月 25 日 (火曜日)、エドワード・ムーア・ケネディ上院議員逝去。マサチューセッツに、否、アメリカにポッカーリ大きな穴が空いた。若かりし頃の、「お金持ちのドラ息子」のイメージは、彼が大統領選出馬を断念した時から徐々に薄れていったように思う。それは、ケネディ家の家長として、二人の兄の遺族を含め、一族の喜びと悲しみとともに常に在ることを優先する決断であった。



あれから四半世紀の間、自らステージを降り、家族を第一に人生の中心においたことによって、逆説的に政治家としての公においても自然（おのず）としてリベラル派の重鎮として、国家の芯となっていたのではないだろうか。

肉親を奪った暴力の負を知るからこそ、報復ではなく平和を、低賃金引上げや医療保険制度等の具体策による「弱者救済」への尽力は、1968 年に凶弾に倒れた兄ロバート・ケネディの手から渡されたトーチではなからうか。

家族を守り、兄達の信念と恒久の正義を実現させるために生きた四半世紀の時は、彼の面差しを、母君を彷彿とさせるほど柔和に美しく変容させていた。オバマ大統領が、「民主党の魂」と讃えるまでにアメリカの正義のために戦い、我のためでなく、家族とその先に広がる公のために、政治家としての有様を以って尽くした。今、アメリカに大きな穴が空いてしまった。彼のトーチはオバマ大統領によって再び正義を実現すべく引き継がれてゆくことを願う。

テッド・ケネディ氏の魂に平安を、ケネディ家御一族に平安を、そして大きな星を失ったアメリカ合衆国に平安を、心よりお祈り申し上げます。

(写真は故エドワード・ケネディ上院議員、
ニュース・ウィーク誌より)

転載 「RUNNERS」 2009 OCTより

ボストンマラソン主催者が

山田敬蔵さんに記念の盾を贈呈

ボストンマラソンの主催者であるボストン・アスレチック・アソシエーション (以下 BAA) が、2009 年の同大会でフルマラソン引退を表明した山田敬蔵さん (81 歳) に記念の盾を贈呈した。

山田さんは 1953 年にボストンマラソンに初出場し 2 時間 18 分 51 秒で優勝。その後、競技者としての第一線を退いてからも含めて計 19 回同大会を走った。1995 年から 2009 年までは連続出場し、その間、4 度の年代別優勝も果たした。

このような形で BAA が選手に記念の盾を贈呈するのは 112 年の歴史の中でも初めてのこと。歴代の優勝者としてボストンマラソンの歴史に名を刻んだ上に、市民ランナーとしても 81 歳まで走り続けたことに対しても敬意を示したためである。山田さんは

「尊敬するジョン・ケリー選手が走ると観衆がとても喜ぶ。私もそんなランナーを目指していた。」

(注 ジョン・アルバート・ケリー(故人)。計 61 回ボストンマラソンに出場し完走は 59 回。2 度の優勝を果たした同大会伝説のランナー。)

(会報担当： この情報は滝沢典之様からお知らせいただきました。感謝。山田さんがこれからも短い距離でも市民ランナーとして走られることで、元気な高齢者の先達としてのお手本を示して下さいを願っています。)

日米少年野球交流

U.S.-Japan Youth Baseball Exchange

昨年、Red Sox 財団と Japan Society of Boston が協力して立ち上げた首記交流プログラムにより、昨夏、日本から 10 代の野球少年 12 名がボストンを訪れ、地元のリトルリーグ・チームと交歓試合を行ったり、ホームステイや観光を楽しんだり、有意義な 2 週間の交流が実施されました。

今年の 8 月には 12 名の野球少年チームがボストンから来日しました。最初の滞在地、千葉では千葉工大のグラウンドで交歓試合を行いました。BAJ からは吉野耕一先生ご夫妻と小生が出掛けて、ホストファミリーの皆さんと一緒に応援しました。一行はその後、大阪、京都、広島を訪問して帰国しました。

棚橋 征一

第64回幹事会

日時: 2009年6月12日(金) 18:30~20:40

場所: NEC三田ハウス 22名出席

- *吉野耕一顧問、帰国挨拶。
- *会計報告: 会計残高報告。
- *お花見の会報告: 4月4日開催、参加者20名。
開始を遅らせ、ライトアップの桜が最高。
- *美術の会・歴史を飲もう会: 茂木本家美術館訪問を
4月26日に開催、27名参加。(別項参照)。
- *カラオケの会: 4月27日開催、報告。7名参加。
- *ボストン地区留学生記録: 日本英学史学会例会(9月初旬)にて発表予定と報告。
- *ゴルフの会: 4月23日開催報告。(別項参照)
- *音楽の会: 5月16日ホーム・コンサートを開催、
好評であった。次回は7月12日。(別項参照)
- *紅葉狩りの会: 11月下旬を予定。
- *総会開催日: 11月13日(金)に変更する。
- *会報発行: 会報第34号の原稿は8月末締切。
次号トップページでは観桜会にて藤崎博也顧問から報告されたWM友好記念館への募金結果の報告を取り上げることを語り、了承をえた。

第65回幹事会

日時: 2009年9月11日(金) 18:30~20:40

場所: 新宿 サミット・クラブ 18名出席。

- *法眼次期会長挨拶。
- *吉野耕一顧問近況報告。
- *事務局報告 新入会員: 北代淳二、河内康郎、
ロイ羊子、折田純一、4名
- *会計報告: 監査前の状況報告。
- *Harvard Club of Japanとの連携状況報告。
①「紅葉狩」の案内をHCJメンバーにも配信。
②HCJ「JAZZ/BOSANOVA」の案内をBAJにも
配信。
- *「ボストンへようこそ」頒布状況報告。
- *美術の会・歴史を飲もう会: 明年4月24日(土)
名古屋ボストン美術館、25日(日)伊勢神宮を計画。
- *紅葉狩りの会: 11月29日又は12月5日(別項参照)。
- *音楽の会: 明年、春・秋2回を予定。
- *カラオケの会: 未定。
- *お花見の会: 明年3月末または4月初め千鳥が淵を予定。
- *留学生の会の記録: 9月5日、日本英学史学会の例会において発表した。(別項参照)
- *ゴルフの会: 11月27日(木)川崎国際。(別項参照)。
- *ハイキングの会: 山の会と合同で企画する。5~10kmコースで、大勢の方が参加出来るプランを選定したい。
- *ホームページ: 活動報告の原稿提供について。
- *関係団体: 吉野顧問夫妻・棚橋征一氏、日米少年野球交流戦を応援。(別項参照)。
- *会報第34号: トップ・ページ稿報告。10月5日発行予定。
総会行事の案内案を語り、了承をえた。
- *次回幹事会: 2010年1月15日(金) 予定。

ゴルフ懇親会のお知らせ

ボストン会の平成21年春期ゴルフ懇親会は、4月23日に11名が参加し、川崎国際生田緑地ゴルフ場で開催されました。優勝は伊藤敦子さん、ネット69。モリシャスへのゴルフ旅行(7月2~9日)は17名、うち当会からは4名参加、すばらしい旅行でした。

次回は11月27日(金)、下記の通りに開催します。

日時: 11月27日午前8:33 アウトコース スタート

場所: 川崎国際生田緑地ゴルフ場

費用: チェックイン時に、各自現金にて支払い。

参加費: 4,000円(参加費・賞品代)

申込数: 16名、申し込み順で締め切ります。

集合: 午前8時15分、1番ホール、ティグラウンド前。

幹事連絡先: 山崎恒

2009年紅葉狩りのお知らせ

1. 日時: 2009年11月29日(日)
又は12月5日(土)
午後1時半旧古河庭園入口
(午後2時半 大谷美術館見学予定)
2. 場所: 旧古河庭園
所在地: 北区西ヶ原一丁目
3. 交通: 地下鉄南北線「西ヶ原」(N15)下車徒歩7分
JR「駒込」下車徒歩12分
JR「上中里」下車徒歩7分
4. 会食: とらふぐ亭駒込店 ☎03-5974-8129
お酒別 6,000円(予定)
5. 申込締切: 11月14日(土)
6. 申込先: 藤盛紀明

「ボストン日本人学生会の記録

(1908-1953)」

日本ボストン会で中間報告した内容をもとに日本英学史学会の9月例会(09.9.5)で発表した。留学生を研究している学者から好印象をもってもらった。ある研究者から明治末期に活動を始めていたボストン日本人会の資料を頂戴したので、ボストン日本人学生会との関係を調べていきたい。戦前のことをご存知のかたのご協力をお願いいたします。

三好 彰